
心魔道具～クール・ウティ

クレージュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心魔道具〜クール・ウティ

【Nコード】

N3238V

【作者名】

クレーヴ

【あらすじ】

外の世界を夢見ていた青年、名をラルク。

毎日変わらず平凡な時が流れていた青年と青年が住む島。

そこに謎の人物達が小さな事件をもたらした。

その出逢いが生み出すものは夢見ていた世界を巻き込む冒険へのプロローグだった。

ウティという不思議な魔道具を巡る物語が始まる。

第1話「赤髪の男」（前書き）

初めまして。この小説の作者「クレイヴ」です。

最初に言っておきますが自分の小説は喋っている人物の名前を表記してあります。

これは物語のテンポを重視したいからです

ナレーションで「何々がこう言った」などと書いているとどうしてもテンポが悪くなってしまうのでワザとこういうやり方をとらせていただきます。

自分の小説に目を通してもらうにあたって、このことだけご了承ください。

内容は誰にでも楽しめる作品にしていこうと思っているので是非一度、目を通していただけると幸いです。

また読んでくださったら感想等いただけると嬉しいです。

では物語スタート。

第1話「赤髪の男」

いつかの時代。

とある島「ラライ島」

周りを海に囲まれた孤島だ。

潮風吹く波打ち際に人影が1つ。

何かを造っているようだ。

場所は変わって森の中にたたずむ家の中。

1人の女性の叫び声。

「キヤー！」

それを聞き波打ち際の男がつぶやく。

「ハア、また母さんか。しょうがねえな」

そういうと男は声の場所へと走って行った。

・・・

「いつもの事だろうけど、どうした？母さん」

「ラルク！見てちょうだい。またこのコンロが壊れたのよ」

ラルク「だからいつも言ってるだろ。そんなのウティを使えばいいじゃねえか」

「嫌よ…あんな物、悪人が使うもんだわ」

ラルク「悪人て…まあそういう風に使うやつらも増えてきてるらしいけど、それなら俺も悪人って事か？」

そう問いかけながら、どこからか火を出すのだった。

「…ありがとう」

男の名は ” フラーム” ラルク ”

年は18歳。身長170前後の体系はいたって普通。

赤みがかった髪と首に巻いてあるハチマキが特徴的な青年だ。

ラルクの母さんの名は ” フラーム” トレン ”

長い黒髪がトレードマークとも言えるだろ。

ラルクがさつき火を出したのは、ラルクが持っているウティに宿りし力。

ラルクのウティは 「宿・ハチマキ タイプ・火」

つまり、ハチマキに宿った火の力だ。

そのハチマキを身に着ける事で自由自在に火を出すことができる。

ウティとは様々な物に宿りし不思議な力。

宿る物も宿る力も様々で徐々にこの世界に現れ始めた。

...

時間帯は昼時。

さつきトレンが作っていたのは昼食だろう。

食事中。トレンが問いかける。

トレン「ラルク、またイカダを造ってたの？」

ラルク「ん？…ああ。ご馳走様」

トレン「待ちなさい、ラルク！ 全く」

ラルクは逃げるように家を飛び出した。

ラルク「全く母さんはいつまで経ってもウティを毛嫌ってるな…まあしょうがねえよな。 父さんがこの世界に溢れ出てきたウティに

疑問を抱き、それを止めようと島を出て行っちまったからな。世界のどこかに封印する場所があるとかホントかよ？ 確かこの世界が崩れ始める前に止めなければとか何とか言っつて母さんの反対を押し切っつて行っちまったんだよな…元気なのか？ 父さん」

最後にそうつぶやいたラルクは一軒の店へと入っつていった。

・・・

ラルクが店に入る少し前、ラライ島の人が賑わう商店街。人々はおろおろとしている一人の女を見ながらヒソヒソと話しているようだ。

「ちよつと見てみ、あんな子この島にいたかしらね？」

「いや…あたしは見た事ないよ」

「おい見ろ、えらい可愛い子がいるぞ」

「お！ 声かけて見るか？」

そんな島人たちの会話をよそに女は何か言っつている。

「ここまでくれば流石に…でも人が居ないところに」

そついうと女は商店街を急いで抜ける為に走り出した。

それに続けて一切目線を外さず見つめていた人影もまた歩き出した。

「逃げられやしないさ」

・・・

ラルクが入った店、木造建築の酒場のような喫茶店という所だろう。

店には似つかない派手な外装、色様々な電灯が飾り付けられている。看板には大きく「ラッチョハウス」と書かれている。

ラッチョ「おくらっしやい、ラルク」

ラルク「ヨッ。相変わらず元気だな」ラッチョ

ラッチョは40代のオジサン。

顔は…まあ置いておこう。

目は開いているか疑うほどに細く髪はオールバック。

顎にうっすらと髭を生やしている。

本人曰く恋には無縁らしいが前に結婚をした事があるらしい。

ラッチョ「飯は？」

ラルク「大丈夫、食ってきた」

ラッチョ「そうか」

少しの会話の後の少しの沈黙。

それを嫌うようにラッチョが話し出す。

ラッチョ「お前の親父が島を出て3年って所か？ ウティは使えるし、まだ封印は出来てないって事だろ？ こっちは店の役にも立ってるし封印なんてゴメンなんだが…もしかしたらもうくたばっちゃったか？」

ラルク「…どうなんだろうな。まあ父さんは大丈夫さ、それよりいつも言ってるだろ？ 俺が封印してきてやるって！ ちやくちやくとイカダも出来てきてるんだ。俺は外の世界を見るのが夢。

そのついでに封印も父さんも見つけてきてやるよ」

ラッチョ「へいへい。知ってるって…期待してるよ」

そう言いながらラッチョは軽く微笑んだ。

ちょうどその時。

「キヤーー!!!」

店の外からの大きな叫び声に二人は驚き顔をあげる。

ラルク「母さん?…じゃねえよな。 ちよつと行って来る」

ラツチヨ「おお…氣いつける」

店を出て声の方へと走っていくラルク。

それを見送るように反対側から足音が。

「ラルク?」

不安そうな顔で店へと入るトレン。

ラツチヨ「らっしやい」

トレン「今、ラルクが走っていったけど何かあったの?」

ラツチヨ「あ、ああ…いや何でもないよ」

トレン「…そう」

ラツチヨ「それより…」

・・・

森の奥、1人の女が座り込んでいる。目の前には1人の男。

「さあ大人しく渡してもらおうか」

ラルク「あそこか」

叫び声の場所を発見したラルク。

走りながら叫ぶ。

ラルク「おい、お前！ 女の人に何やってんだ！ 変態か？」

「変…誰だお前は？ 部外者は大人しく消えろ」

続けて座り込んでる女も怒鳴る。

「あんた、危ないからどっか行って！」

ラルク「嫌だね、人が困ってる時は助けろって言われてるんだ」

(チツ…面倒なのがきたぜ)

座り込んでる女にラルクが問いかける。

ラルク「どうしたんだお前？」

「一緒に走って」

困った顔の女は少し悩むとラルクの手を取り森の奥へ走りだす。

「だから逃げられやしないぞ。ここは孤島」

...

ラルク「お、おい…もういいんじゃないか？ どうしたってんだ？」

「ハア…ハア…あんた名前は？」

ラルク「俺はラルク」

「ラルクね。私の名前は”エレク”トリスイテ”。とりあえず 宜しく」

ラルク「ん？ ああ…ヨロシク。エレク」

エレク「で、さっきの男の名前は”コルト” ” 闇の心魔団」

テネーブル・ウティ”の一員よ」

ラルク「テネーブルウティ？」

エレク「テネーブル達は謎が多い組織。何が目的かは分からないけど、一つ分かっていることは白いウティを狙っているということ。今も私が持っている、この白いウティを狙っているの」

ラルク（…白？）

エレク「トリスイテはラルクと変わらない年だろう。」

黄色と黄緑が混ざりあった肩まである髪。服は汚れているが高価そうな感じだ。

左手の中指につけている指輪を見せ説明したところを見るとそれがウティだろう。

「宿・指輪 タイプ・風」

先ほどのコルトという男は中年の黒髪。

痩せ型で身長が高いヒョロとした感じだ。

ラルク「その白いウティは何か特別なのか？」

エレク「私も詳しくは良く分からないの。ただ家では丁寧に扱われていたし何か色々謎があるんだと思う。だから私は逃げてきた…一人。一人だけで」

ラルク「一人だけってどういうこと…危ねえ！」

間一髪でエレクを引っ張り火の玉をよける。

コルト「ほくよくよけたもんだ。しかしもう追いかけることは止めにしようぜ。さっさと渡してくれねえか？ その白いウティを」

エレク「…」

ラルク「おい、おっさん。俺は強いぞ」

コルト「自分で言っちゃ世話ねえな。じゃあつまりそういうことか？」

ラルク「ああ、ぶっ倒してやるよ」

・・・

ラッチョハウス。

ラッチョ「それより…ラルクの事だけど」

トレン「…夢の事？」

ラッチョ「ああ。トレンさんも知ってるんだろ？俺が言うのもな
んだけど、あいつはもう立派に成長した。だから、そろそろ旅立
たせてやってもいいんじゃないか？」

トレン「…分かってる。分かってるけど、あの人みたいに帰って
こなかったら…」

ラッチョ「それもラルクは任せるだってよ。あいつがいつも言っ
てること知ってるか？」

トレン「いつも言ってること？」

ラッチョがそう言つとトレンは首をかしげた。

・・・

場面は森の奥

ラルク「行くぞ！」

そういうとラルクはコルトに向かって走り出す。
パンチを出しては防ぎ、出されては防ぐ。
一進一退の攻防がしばらく続く。

コルト（成る程…口だけじゃないみたいだな。

しょうがない）

コルトの手首に巻かれているハチマキが光、手の平から火がラルクの腹めがけて飛んだ。

ラルク「グツ…熱い！」

コルト「どうだ？ 俺のウティの力は？」

コルトのウティ「宿・ハチマキ タイプ・火」

ラルク「火の力？ さっきの火の玉もウティだったのか。しかも俺のと一緒ってことか？」

コルト「ほゝお前も火のウティか。だが実践経験つてのを知ってるか？」

そういうとコルトは両手を広げラルクに向ける。

その手の平からラルクへ向かって火の玉を連続して打ち放つ。

ラルク「うわ！ 危ねえ…うわ！」

ラルクも火を出し、相殺をしているが数が多すぎて避ける事ばかりだ。

コルト「ほらほら。 ククク…自分ばっか避けてていいのか？」

そういうとコルトはエレクの方へと火の玉を飛ばす。すぐさまラルクの方へも。

ラルク「しまっ！ クソッ！」

エレク「キャッ！」

何としてもエレクの方は守る。

その強い想いに反応したかのようにラルクのウティが白く輝きエレクの前に白い火の壁が現れ、そこに火の玉はぶつかり消えた。

「白！」

エレクもコルトも驚き、同時に同じ言葉を発した。

エレクを守ることにしか考えていなかったラルクに火の玉が直撃する。

ラルク「ガハッ！」

その場に一瞬、倒れるが何とか立ち上がりエレクの方へと。

ラルク「お、おい。大丈夫か？」

エレク「…ええ。それよりラルク。今の白い火」

ラルク「ああ…俺のも白いの出るぞ」

コルト「ハーハッハ、丁度いい。2つも持って帰ったとなると俺

は手柄だ。お前らを倒して俺がたく貰ってやるよ」

ラルク「（倒す？） 何言ってるんだ、お前。俺は…」

・・・

ラルク「あいつはいつも、こう言ってるよ。俺の…」

トレン「俺の？」

・・・

ラルク「俺はこんな所で倒されねえ！俺には自分に誓った目標があるから。それを達成させるまで死ねないんだよ。誰にも俺の夢は邪魔させねえ！」

「ルト」「いっひ…」

・・・

ラッチョ「夢は邪魔させねえってな」

そういうとラッチョは微笑んだ。

トレン「…夢」

・・・

エレク「ラルク！ あんたの白いウティと私のこの風の力の白いウティ」

ラルク「何だ？」

エレク「謎だらけの白いウティだけど分かってることもある。ウティは心の強さが大事。だから2つ以上同時に使うと、気持ちのこもっている物から順に段々と力が弱くなってしまう。だけど白いウティ同士は気持ちいが分かれぬ。想えば想うほど全てに反映される！」

ラルク「よく分かんねえけど、つまり思いつ切りやればいいんだよな？」

呆れ顔したエレクが言う。

エレク「つまりそういうこと」

ラルク「OK。火と風の融合だ」

コルト「ごちゃごちゃとおまじないでも唱えてたか？ じゃあそろそろサヨナラだ」

そういうとコルトの手のひらに巨大な火の塊が作られていく。

ラルク「…そうだな。 サヨナラだ」

エレクに渡された指輪が光る。

するとラルクの周りに風が漂い始める。

それは目に見える白い風。

コルト「ハーハッハ。 じゃあ…死ぬ。 ”コロサル・フウル 巨大火玉”」

コルトが放った巨大火の玉の周りを白い風が包むと同時にラルクが消える。

風に包まれた火の玉は一瞬で消えてしまった。

コルト「なんだと！ どういうことだ…どこいった！」
ラルク「クール・フュージョン心の融合…」

次の瞬間だった。

気づけたのは一瞬…一瞬だけ気づけたコルトの顔が恐怖に歪んだと同時にラルクは目の前まで来ていた。

風をまとった事で風の速さを手に入れたラルク。

白い火と白い風を体全体にまとったラルクが頭からコルトに突っ込んだのだ。

コルト「は…や」
ラルク「ヴァン・ファイ風速の火人”」
コルト「ガハッ…」

ぶっ飛んだコルト。

木を何本か突き破って気絶した。

ラルク「じゃあな、変態」

そういうとラルクは力尽きたように倒れた。

エレク「ラルク！」

駆け寄るエレクはしばらく呼んだ後、呼ぶのを止めた。

ラルクから小さな寝息が聞こえてきたからだ。

エレク（疲れただけか。そりゃあ急にこんな事があったんだもんね。それにしてもあれだけの威力。心の強さが大きければ威力もあがる。ラルク、夢は邪魔させないって言ってたけど、相当、強い気持ちなんだろうな）

ラルク「スースー」

エレク「…ありがとう」

・・・

場面はラルクの家。

ラルク「ん、ん」

トレン「ラルク！ やっと起きたわね。 エレクちゃんから話は聞

いたわ。 あんたは無理して」

ラルク「い！ 母さん！」

エレク「ラルク、ちよつといい？ 時間がないから単刀直入に話す

わ

ラルク「ん？ どうした？」

エレク「私、さっき一人で逃げてきたって言ったでしょ？ 私の家に白いウティがあった事で私の家は狙われていたの。何とか私だ

け白いウティを持って逃げるように言われたんだけど、街が家族が心配で。今日逢ったばかりの貴方をお願いするのも悪いんだけど他に頼める人もいない。だからラルク、私を助けてくれない？」

どことなく涙声のエレクをよそにラルクは即答する。

ラルク「いいぞ」

エレク「え？ ほ 本当に！」

ラルク「ああ。 だけど……」

そう言いながらトレンの方を見る。

トレン「……いいわよ」

ラルク「え？」

トレン「いいわよ。 あんたの夢、私が邪魔するわけにもいかないでしょ？ ウティの封印、父さん探し、エレクちゃん助け、全部片付けて帰って来なさい。 だけどいい？ 無茶だけはしないでね？」

ラルクの顔がゆるみだす。

ラルク「ありがとう！ 母さん。 全部、俺に任せとけ」

トレン「調子いいんだから」

トレンは呆れ顔だ。

エレク「ありがとうございます。 お母様」

トレン「いいのよ。 ラルクを宜しくね」

エレク「はい！」

ラルク「よし、そうと決まったら早いにこした事はない。 さっさとイカダ作るぞ！」

エルク「私が乗って来たのがあるわよ」
ラルク「何？ ホントか！ よし出発！」
E&T（いくらなんでも早すぎるって）

こうして夢・目標・野望、多き男の冒険が始まる。つととしている。

第1話「赤髪の男」(後書き)

冒険の始まり！

ここまで読んでいただきありがとうございます。

第1話ということで切り良く話を終わらせたかったので長くなりましたが次回からは1話1話はもう少し短くする予定です。

ではまた次回「旅立ち」へ

第2話「旅立ち」

一晩が経ち、次の日の早朝。

海岸でラルクとエレクは出発の準備をしている。

それを見守るトレンとラッチョも一緒だ。

エレクの乗ってきたらしい船は至って普通。

人が3人ほど乗れる小型のボートのようだ。

トレン「大丈夫？ 忘れ物はない？ ハチマキは持った？」

ラルク「大丈夫だって、ウティもしっかり持った。 今度、母さんが見るときはただのハチマキかもな」

そういつてラルクは笑い出した。

トレン「気楽なんだから。 それと、これ持って行きなさい」

ため息をつきながらトレンは1つの小さな袋をラルクのバッグに詰め込んだ。

ラルク「ん？何だ？ 何入れたんだ？」

トレン「時が来たらあけなさい。 大事なものはずだから」

ラルク「はず？ よくわかんねえけど、まあいいか」

エレク「それじゃあそろそろ出発しましょうか？」

ラルク「おお！ やつと外に…ワクワクが半端じゃないぞ、俺」

ラッチョ「気いつけるよラルク。 エレクちゃんも無理しないで危

ないことはラルクに任せろ」

エレク「フフ、ありがとうございます。」

ラルク「それじゃあ母さん、ラッチョ、行って来るぞ！」

ラッチョ「おお！ 期待して待つてるぞ、行って来い！」

トレン「行つてらっしゃい。 本当に気をつけて無事帰ってきてね」

トレンの顔は笑顔だが、どこか引きつっていた。

そして2人に見送られながら一隻の小船は波に乗っていく。

トレンの心配をよそに2人は笑顔でそう言うのだった。

「行つてきまゝす！」

トレン（あの子が本当に旅立つ日が来るなんて思つても見なかった）

・・・

時は3年前。

暗い部屋でトレンと誰かが話している。

姿、形は見えないがラルクの父親らしい。

「万が一、ラルクの野郎が島を出て行く時、いや…出て行くだろうな。 あいつは俺の子だ。 その時はこいつを渡してやってくれ。」

きつとあいつの役に立つはずだ」

トレン「あなたまでいなくなって、そしてあの子も？ あの子が島を出て行くのなんて私は反対するわ」

「…トレン。 人は夢だけは捨てきれないのさ。 例え叶うかどうか分からないけどもな」

トレン「…」

「じゃあ、ちよっくらいつてくらあー！」

・・・

小船は段々と遠ざかり、次第に見えなくなっていく。

トレン（これでいいのよね？　しっかりあなたの夢の欠片、渡したわよ）

ラッチョ「行っちまったか…」

トレン「ええ。でも行つてきますって言ったわよね？」

ラッチョ「ん？」

トレン「それじゃあ　”ただいま”って帰ってきたとき　”おかえり”って言う日まであの子の帰りを待つてないかね」

そういつてトレンは微笑んだ。

ラッチョ「ああ、その通りだ」

それにつられてラッチョも笑うのだった。

天候は快晴。

笑顔で送り出した送り人たちの中で一人、泣いている人影の話はいずれまた…。

その子が泣き止んだ時にでも。

ラルク「待つてろよ！　世界！」

第2話「旅立ち」（後書き）

憧れを現実にいざ。

ここまで読んでいただきありがとうございます。冒険がスタート。

ここから盛大に長い旅が始まっていく予定です！

ではまた次回「トリスティ島」へ

第3話「トリスティ島」

天候は晴れ。 波は穏やか。
海の上に行く小船の上。

エレク「そういうばラルク。 お母さんから何か渡されてなかった？」
ラルク「ん？ そっぴや何だろっな」

そっぴやとラルクはバッグをあさり渡された袋を取り出してみる。
袋は野球ボールより多少大きいくらいの大きさで変わった所もない
ただの白い袋だ。
袋の出入り口は一本の紐で固く結ばれているようだ。

ラルク「袋だ」
エレク「袋ね」
ラルク「あけてみるか」

渡されるのは見ていたが会話までは聞いていないエレクは何も言わないで見ている。

” 時が来たら ”

言われたことを忘れていいのか意味が分からないのかは定かではないがラルクはすぐさまあけにかかった。

ラルク「んん！ ん！ ん？…あかねえぞ、これ。 ビクともしねえ」
エレク「貸してみて」

ラルク「ほい」

エレク「ホント。 かったいわね、これ…紐が固く結ばれてるとい
うより感じが違う気がする」

ラルク「燃やしてみるか」

エレク「え？」

ラルク「そら！」

そういうとラルクは火を出し袋に近づけた。

エレク「ちょ！ いいのそれ？」

ラルク「俺が渡されたんだから問題ない！」

エレク「だけど…全然駄目ね。 焦げ跡すら出来ないのはどうい
う理屈？」

ラルク「不思議だな」

エレク（あれ？ 今…袋が動いたような…気のせいよね）

時が来たら…時とはいつなんだろうか？

ラルク「なあ、それよりお前の島ってまだか？」

エレク「そんな遠くはないけど…多分もうじき見えてくると思うわ
よ」

ラルク「楽しみだな」外の世界なんて見るの初めてだ。 これで夢
が1つ叶うし案外すぐ島に帰れるかもな」

エレク（ホント気楽でいいわ）

笑顔のラルクを見てエレクは呆れている。

それもそうだエレクは街が心配なんだから。

ラルク「じゃあ着いたら起こしてくれ」

エレク「は？」

そういつとラルクは横になり寝始めた。

エレク「全く…」

・・・

しばらく経っただろう。

まだ小さくではあるが遠くのほうに薄っすらと島影らしきものが見えてきた。

エレク「ラルク！ 起きて！ 見えてきたわよ」

ラルク「本当か！ おゝ島だ。 外の島だ。 早く漕げ、漕げ」

本当に寝てたのか疑いたくなるくらいにラルクはすぐに飛び起きた。そして精一杯、オールを漕ぎ始める。

目では島影が何とか確認できるほどの距離だったが、段々と島が大きくなってくる。

ラルライ島と比べると何倍もの大きさであろう。

ラルク「うお！ デケ〜何だこの島。 島か？ ホントに島なのか？」

エレク「確かにこの ” トリスイテ島 ” アイランド も大きい島ではあるけれど、世界にはまだまだ大きな島や大陸があるわよ」

ラルク「そうなのか？ 世界は広いんだな〜ん？ トリスイテってお前と…」

ラルクの言葉をさえぎる様にエレクが言う。

エレク「さあ、早く上陸しましょう。 街が心配だわ」

ラルク「お、おお」

上陸準備をし始める2人。
街で鳴った爆音が2人に聞こえるのも、
ほぼ同時刻。

第3話「トリスティ島」(後書き)

早くもトラブル？

ここまで読んでいただきありがとうございます。この本は、船の上での会話だったり、気が楽で書いてて楽しいです。

ではまた次回「OK」へ

第4話「OK」

その音は島にいるもの達、半数は聞こえたと言っても過言ではないくらいに大きく響いた。

上陸準備をしている2人にも勿論、聞こえている。

街人たちの声だろうか。

島はすぐさまざわついてきた。

ラルク「何だ！ 今の音」

エレク「（爆発？…お父様、お母様） ラルク！ 急ぐわよ」

ラルク「ああ」

準備もままならない中、2人は島へと急いで上陸した。

エレクは手提げのカバンこそしつかりと持ったがラルクは何も持たずに飛び出していった。

街では人々たちが海岸へ向かって逃げているのだろう。

2人はその人混みがくる方へと人ごみを掻き分けながら走っている。

島の中心だろうか？

大きな城らしきものと黒い煙が見える。

どうやら2人はそこへ向かっているようだ。

エレク「あそこの城へ。 急いで」

ラルク「ああ、分かってるって」

エレク（お願い…どうか無事で）

・・・

一方、その城の下。

「何も砲弾をぶっ放さなくてもよかつんじゃないか？ 外にだつて兵はいるんだし」

「それもそうだが、何せ、” サルク様 ” の命令だからな。 逆らえはしねえよ」

「橋が粉々になつちやつて。 出入りが出来ないんじゃないか？ 高そうな城なのになく勿体無い」

「おいおい、そのの2人。 無駄な話は止めとけ。 雷が落ちるぞ」

格好こそ動きやすいようにラフだが髪は緑色でツンツン。

目つきもよくはなく第一印象では恐怖を抱いてしまいそうな印象。 そんな1人の男がポケットに両手を入れながら歩いてきた。 男の注意を受け2人の兵士が慌ててこう言う。

「す、すみません！ リューム様」

リューム「しっかり見張つとけ。 他の兵たちもな」

「はい！」

リュームが立ち去ろうとした時、城の窓から声がする。 姿は確認は出来ない。

「おいおいリューム。 何やってんだい？ そんな所でい」

リューム「…散歩だ気にすんな」

「そろそろだ。 集まつとけい」

リューム「ああ」

・・・

場面は城内

「時間か…我慢も限界だな」

そういうと立ち上がり部屋を出て行く。

向かった先、部屋の扉の上に「王座の間」と書かれている。

男はそこへ入っていった。

中にはリュームと並んでもう一人先ほど窓に居た男のようだ。

髪は黒髪。リュームより少し小柄な猫背気味の男。

目は細く口からは八重歯を覗かせている。

その口から舌を出し自分の手を舐めては顔を拭き、猫のような仕草をしている。

男が部屋に入ると2人は軽く礼をした。

リューム「サルク様、あそこに」

どうやら入ってきた男がサルクらしい。

金髪で目つきはリュームより悪い。

それは冷たい目、何者をも見下しているようなそんな目だ。

服装は落ち着いているが大きなマントを羽織っている。

サルク「見れば分かるさ」

リュームが指指した方には60代後半くらいだろうか？

年老いた2人の男と女がいる。

サルク「貴方たちを、拘束しだして5日目。まさか兵を振り切っ

て逃走でもしようと思いましたか？ おかげで橋が壊れてしまいました

たよ。 トリスイテご夫妻」

2人は無言のままサルクを睨み付けている。

サンク「そう怖い顔をしないでください。話してくれさえすればいいんですよ。白いウティの隠し場所を」

・・・

その頃、ラルクとエレクは城の目の前まで到達していた。

ラルク「デツケエ城だなくでも壊れてる」

エレク「橋がない！」

壊れた橋の前でラルクは城を。

エレクは辺りをキョロキョロと見渡している。

そんな2人に橋の向こうから先ほどの兵士が大声で話しかけてきた。

「おい…誰だお前ら！　ここらは関係者以外立ち入り禁止だ！　さっさと立ち去れ」

ラルク「だってよ。　どうする？」

エレク「そんなの決まってるわ。　城の中へ」

ラルク「OK」

ラルクはニヤついた。

第4話「OK」（後書き）

アクシデントはワクワク？

ここまで読んでいただきありがとうございます。
さて城へ行く手段を詳しくはどうしようか考え中です。

ではまた次回「城へ飛べ」へ

第5話「城へ飛べ」

城へと渡る壊れた橋の前。

エレクは腕を組み険しい顔を、ラルクは辺りをキョロキョロと見渡している。

エレク「だけどどうやって城の中に行けば」

エレクがそういうとラルクが壊れた橋のすぐ目の前まで走っていく。そこには壊れた橋の残骸、どうやら石で造られた頑丈なものだったらしいが粉々だ。

その側には木の板も落ちてている。

何やら書かれているが字は読めない。

看板だったのだろう。

それを手に取るとラルクは再びニヤついた。

ラルク「おい！ 俺とお前のウティで…」

ラルクがしばらく話すとエレクは驚いて声をあげる。

エレク「そ、そんな事できるの？」

ラルク「前によく遊んだことがある。俺1人なら俺のウティだけでも出来るけど2人ならお前の力も借りたほうがいいな」

エレクはあまり乗り気ではないが他に方法もない。

ラルクの自信に賭けてみようと思ったのだろう。

エレク「分かった」

エレクが返事をする。ラルクは拾ってきた板を地面に置きその上に立った。

エレクはそのラルクに前から抱きつくようにしがみつく。

エレク「密着してるからって変なことしないでよね」

ラルク「変なことって何だ？」

エレク「ゴメン。あんたにきつとそんな気は微塵もないわね」

ラルク「よく分からねえけどまあいいや。それよりいいか？ 思いきり風を出せ」

エレク「大丈夫なんでしょうね？」

ラルク「ああ、大丈夫だ」

エレク「それにしてもあんた身軽ね。荷物は？」

ラルク「ん？ 船に置いてきた」

エレク「ハア、まあいいけど」

ラルク「じゃあいくぞ！」

そう言うと同時にラルクの足元から火が出始める。

木の板を包み込むようにエレクの風も出始めた。

ウティは使用者が調節はできるうえ、例を挙げると火を出すだけで燃やすことはしないなど言った調節も可能だ。

まさに今、ラルクの足元から火が出てるが衣類諸々や木の板は燃えはしない。

しかし火の勢いはどんどん上がっている。

ラルク「よし…動き出した。一気に行くぞ！ 心の融合…」
クール・フュージョン

エレク「バカ！ ちゃんと前、注意して」

ラルク「パティナー・ジュボード風纏う火板」

その合図と共にラルクの足元から出ていた火が後ろに向かって思い切り吹き出した。

すると木の板がまるでエンジンをつけたスケートボードのように走り出したのだ。
しかし車輪はついていないのでガガガと地面をこする音が響いてはいる。

そのまま壊れた橋の方へと走り、上空へと飛び出した。
橋が架かっていれば道はあるが今は何も無い。

飛び出したはいいがこのままでは当たり前だが重力によって落下するだけだ。

ラルク「今だ！」

エレク「分かっているわよ！」

すると今度はエレクが思い切り、風を木の板から下に向かって出すのだった。

何とも不思議な光景かもしれない。

まるで火に乗った男女が橋を飛んでいるかのように飛び越えてきているのだ。

それに気づいた城の前に居る兵士達がざわつき始める。

「んゝ何か来たぞ」

「何だ！ あいつら」

「どうする？」

「どうするも何も侵入者なんて入れたら俺たちが怒られる。 何処の誰だか知らないが打ち落とせ！」

兵達は大砲の準備に取り掛かる。

ラルク「ん？ 向こうで何かやりだしたぞ」

エレク「向こう？ ちょっと…大砲撃とうとしてるじゃない！ 着地した瞬間を狙われたらよけれもしないで死んじゃうわよ！」

ラルク「大砲なんて喰らったら大怪我だぞ！」

エレク（怪我ってあんた…）

ラルク「よしまかせろ。着地したらお前は先行ってる」

エレク「え？ え…ちよつと何する気？」

「今だ！ 撃て！」

橋を超え地面へと着地した2人。

と、同時に兵達が砲を撃つ。

ラルク「フラム・ミュール 炎上壁”」

ラルクの前に出来た大きな火の壁。

大砲の弾はそれにぶつかり爆発した。

ラルク「つたく、危ねえな」

エレク「あんな怖いことよく出来るわね…」

着地と同時に走り出していたエレクはその光景を見ながら城の扉の前までついていた。

エレク「急がないと」

・・・

一方、城前。

「誰だお前！」

ラルク「俺は旅のものです。この城を見学しにきました」

「そうですか、そうですか。それじゃあ中に」

「バカヤロー！ そんなわけにいくか。追い出せ！」

ラルク「ハア、早く城ん中、見てえな」

ラルクは兵など眼中になく城だけを見つめていた。

第5話「城へ飛べ」（後書き）

到達！

ここまで読んでいただきありがとうございます。
この話は丸々、当初の構想案と変えましたね。
前のは無理があつたかな（笑

ではまた次回「侵入者」へ

第6話「侵入者」

城内、王座の間。

リユームは兵士の1人から何か報告を受けている。捕らえられているのは男女1人ずつの2人。

男の名前は ” プランス・トリスイテ ”

左目に青いモノクルをつけており白髪の長髪でガタイがいい。

さらには鼻下や顎にも白色の長めの髭が生えている。

服は城の者だけあって高価なようだがテネーブルからの扱いが悪い様子が伺えるほどに汚れている。

女の名前は ” ロヌ・トリスイテ ”

右目に赤いモノクルをつけている。

どうやらフランスとのお揃いのようだ。

髪は白髪で長いようだがテッペンで丸く結ばれている。

体系は少しポツチャリとしているが顔は薄化粧で大丈夫なほどに綺麗である。

服装はフランスと同じく汚れてしまっている。

サンク「さあ白いウティは何処に隠したんです？ トリスイテ王」

フランス「…ここにはそんな物はないといっているだろう」

サンク「トリスイテ王…調べはついてるんですよ。指輪に宿りし白い力。そのウティがこの城にあることは」

リユーム「サンク様、侵入者がいるとの報告が。城外に1人、赤髪の男。城内に黄色と黄緑がまじった髪の女が入ったとの事です」

ロヌ（黄色と黄緑がまじった…）

フランス（女…エレク！）

サンク「お前からで何とかしろ」

「了解」

返事をするとうちを出て行くリユームと猫背の男の2人。

「俺が男をやるぜい。お前は女を探せい」
リユーム「勝手にしろ」

...

城外。

空から何か赤いものが降り注いできている。

ラルク「フラム・ブリュイ” 火雨”」

雨粒のように無数の火の玉が兵たちの上に降り出し始めた。

「熱い！ 水！水！」

「やばいぞ。あいつウティを使ってる」

「大砲を撃てえ！」

そうとうとラルクに向かって砲弾を放つ。

余裕そうなラルクは砲弾に何かしようとしたが、その時何かが光り
砲弾が2つに割れ、ラルクの両わきで爆発した。

ラルク「ん？ 何だ？」

「おいおい、折角出来た楽しい。邪魔すんない」

「ポンチキ様！」

ポンチキ「あとは俺に任せてお前らは他の場所でも見張ってるい」

「お任せを」

ラルク「誰だ？ お前」

ポンチキ「どうでもいいだろい。 さあ侵入者出て行ってもらおうか」
ラルク「邪魔すんなら倒してくぞ」

・・・

城内、階段。

エレクは上に向かってその長い螺旋階段を走っている。

エレク（王座の間、王座の間。 お父様、お母様）

走っているエレクに階段の少し上の方にいた男が話しかける。

「よう、エレク王女。 やっとお帰りか？」

エレク「だ、誰…あなた！ 何してるのここで」

リユーム「俺の名はリユーム。 以後、お見知りおきを」

エレク「そこをどいて！」

リユーム「それは無理なお願いだな。 ここを通すと俺の信用問題になっちまう。 侵入者には出て行ってもらおうか」

エレクの顔が怒りに満ちて来ている。

エレク「あんたが侵入者じゃない！！」

リユーム「じゃあお互い、侵入者を追い出すとするか？」

エレク「クソッ！」

リユームは螺旋階段を飛び降り、エレクの前に立ち塞がった。

第6話「侵入者」(後書き)

阻み阻まれる。

ここまで読んでいただきありがとうございます。
戦闘描写はあまり得意ではないんですが…次回、頑張ります。

ではまた次回「ラルクVSポンチキ」へ

第7話「ラルクVSポンチキ」

城外、城前。

ラルクVSポンチキ。

ラルク「早く城行きたいから、さっさとやるぞ」

そういうとラルクは手の平をポンチキに向ける。
そのポンチキはというと靴を脱いでいるようだ。

ラルク「見よう見真似だけ…」

ポンチキ「話が早いねい。早くきない」

ラルク「行くぞ！」
”火乃玉”フラム・ブウル」

ポンチキに向かって手の平から1つの火の玉を飛ばす。

ポンチキ「火のウテイかい？ だがイマイチ…」
”電爪”でんそつ」

ポンチキの爪が光りラルクの放った火の玉を切り裂いた。
切られた火の玉は2つになりポンチキの左右を飛んでいく。
どうやら先ほど砲弾を切り裂いたのもこの力だろう。

ラルク「い！ 火が切れた？ 何だ？」

ポンチキ「俺のウテイは」宿・つけ爪 タイプ・電気” だい」

ラルク「電気爪か。面白い」

ポンチキ「嬉しそうだない。何かムカツクない…」
”電気猫”でんきねこ」

そういうとポンチキは両手を地面につけると猫のようにラルクに向かって走り出した。

電気の力を帯びた爪により、四足歩行で人間離れた速さで走る事が可能になっているようだ。

ポンチキ「じゅっしでんそつ十指電爪”」

ラルク「両手全部、電気か！」

両手両足を地面につけ走ってきたポンチキ。

ラルクの目の前で両手を地面から離すと、その両手をクロスさせ斬り裂こうとしてきたのだ。

ラルクは間一髪、その手をその場にしゃがんで避けた…が。

ポンチキはしゃがんでいたラルクをジャンプで飛び越えながら空中で体をひねる。

そのまま逆さ間の状態で手だけで地面に着地すると同時に両足でラルクを上空に蹴り上げたのだ。

ポンチキ「じゅっそくしてんそつ十指電爪”」

ラルク「ぐわあ！」

上空に吹っ飛ばされるラルク。

ラルク「クソ…足も全部か。変な格好しやがって」

「体痺れてないかい？ 中々タフだねい」

ラルク「ん！」

上空に飛ばされていたラルクのさらに上空にポンチキはジャンプしていたようだ。

体を丸くし、両手の爪、両足の爪を全部集め合わせると回転しながらラルク目掛けて落下してきた。

ポンチキ「トゥエンティー・ブリック二十爪電回”」

ラルク「の野郎…そっちが電気なら俺は火だぞ。」

フラム・オンゲル
”火爪回”」

ラルクも両手の爪から火を出し回転し始めたのだ。
回転する事で、そう見える火と電気の円盤。

そのままその2つの円盤がぶつかり、お互いが別々の方へ弾け飛んだ。

ポンチキ「ツツ！ 危ねえない」

「^{フラム・ブウル}火乃玉”」

ポンチキ「グワツ！」

ポンチキは腹部に火の玉が直撃しよろめく。

ラルク「どうだ！ この電気爪め」

ポンチキ「痛えけど…やっぱ男の方がやりがいがある！ 女じゃこ
うはいかないもんねい。 読み通りお前の方にきて正解だったねい」

ポンチキは手を舐め顔を洗いながらそう言った。

ラルク「俺の方…？」

・・・

城内、螺旋階段。

エレクVSリユーム。

目の前に降りてきたリユームとジツと睨み合っている。

リユーム「おいおい、そう怖い顔すんなって。 俺は別にお前を倒
しにきたわけじゃない」

そう言いながらリユームは階段の手すりに背をもたれた。

エレク「え？」

リユーム「侵入者を任されたただけ。だから別にお前と戦わなくてもいいわけだ」

エレク「でもそこは通してくれないのよね？」

リユーム「それは…どうだろうな？」

エレク「あんた何がしたいの？」

リユーム「…教える必要はないだろ？ まあ大人しくしてくれよ」

エレク「…お断り！」

そういつてエレクは指輪をリユームに向けた。

リユーム「それがお前のウティか？」

エレク「そう、これがあんた達が狙ってる白いウティよ」

リユーム「どうりで探してもないわけだ。 やっぱりお前が持ってたのか」

エレク「やっぱり？ あんた知ってたの」

リユーム「いや…俺が知ってたのはこのトリスイテ家にはお前がいるって事。 サンクの野郎はそこまでは調べてないらしいが。 爪が甘いんだよ」

エレク「じゃあ何故、私を探さなかったの？」

リユーム「わざわざ俺が教えるあげるなんて親切しなくてもいいだろ？ だがお前が現れて白いウティを持ってると話になる…俺の計画通りになってくれれば幸いだ」

エレク「計画？ 計画って…」

そういつてリユームは無線だろうか？

誰かと話し出した。

リユーム「こちらリユーム、サンク様。 白いウティ見つかりました。 連れて行来ますか？」

エレク「な！」

リユーム「了解です。 すぐに」

エレク「何？ 連れてかれはしないわよ」

リユーム「大人しくしてろ。 両親の所へ行かせてやる」

エレク（こいつ…何なの）

疑いつつも戦闘しないのであればそれが一番いいと思ったのだろう。エレクはついて行く事にした。

・・・

トリスティ島、ラルクやエレクがいる城へと続く道。その道を一つの袋が跳ねていた。

第7話「ラルクVSポンチキ」（後書き）

この袋は？

ここまで読んでいただきありがとうございます。

さて…戦闘どうだったでしょうか？

頑張ったつもりですが…光景が目に浮かんでいただけると幸いです。

ではまた次回「王座の間にて」へ

第8話「王座の間にて」

城外、ラルクVSポンチキ。

ラルク「俺の方？ 今、俺の方って言ったよな？」

ポンチキ「ああ、侵入者は2人、男と女がいるってことだったけどよい…戦うならやっぱ男だろい？ だから女の方は他の奴に任せたってわけだ」

ラルク「エレク…おいお前、そこをどけ」

ポンチキ「ん？ 何だってい？」

ラルク「どけって言ったんだよ！」

ポンチキ「どいて欲しけりや俺を倒すことだない。 さあもつと戦

…」

ポンチキが喋りだすと同時にラルクはすでに走り出していた。

右手の拳は赤く燃えている。

ポンチキ「…おうぜ…い？」

ラルク「だからそこをどけって言ってんだ」

走りながらラルクは火をまとった拳をポンチキの顔めがけて繰り出した。

ラルク「フラム・フラン炎拳”！”」

ポンチキ「ガファ…い」

ポンチキはそのまま垂直に吹っ飛び、壊れた橋から頭だけを垂らし気絶したようだ。

そんなラルクは城の扉の目の前まで到着していた。

ラルク「ゆっくり見てえけど急ぐか」

・・・

城内、王座の間。

サンクは普段はフランスかロヌが座っているであろう立派な背もたれつきのイスに腰をおろした。そして足を組み、笑いながら話し出す。

サンク「さて…トリスティご夫妻。　白いウティがやっと見つかりました」

フランス「ッ！」

サンク「どうにも不思議なことに侵入者の女が持ってたらしくてね。　貴方は本当に知らなかったという事ですか？　しかし何故、侵入者が」

ロヌ「その子には何もしないで！」

サンク「……？」

不思議そうな表情のサンク。

その時、王座の間の扉が開き、エレクとリユームが入ってくる。

リユーム「お待ちませを」

エレク「お父様！　お母様！」

フランス「やはり戻って…クッ」

ロム「エレク！」

フランス「何故戻って来た…」

サンク「…お父様？　お母様？　エレク…」

不思議そうな顔をしていたサンクが徐々に笑い出す。

サンク「トリスイテご夫妻。　そういう事ですか…これでやっと繋がりました。　つまりそちらの方はトリスイテ家のお嬢さんということですか」

エレク「ええ、そうよ！　あんたお父様とお母様に何をしたの！」
サンク「お嬢さんも怖い顔しないで。　白いウティを持つてるんでしょ？　それを渡してくればすぐにでも解放してあげますよ」

エレク（これを渡せば解放）
フランス「駄目だ！　エレク、それをこんな得体の知れない奴らに渡しては駄目だ！」

ロヌ「あなた…」

エレク「だけど…」

フランス「駄目だ！　私らはどうなってもいい。　それを持って逃げなさい」

エレク「いいわけないじゃない！　大丈夫、心強い仲間が出来たらこんな奴ら追い出せるわ。　だけど今…」

サンク「意見は食い違えばかりですね…大人しく渡してくれそうもないですし、その心強い方にこられても面倒だ」
リユーム「…」

リユームは無言で目を閉じ立っている。

サンク「無理やりというのはあまり好きではないんですが、仕方ない…貴方方から奪うことにしましょう」

フランス「待て！　その子には手を出すな！」

ロヌ「私達ならいくらでも…」

エレクをかばう2人。

その2人をかばうようにエレクは両親の前に立つ。

エレク「来なさいよ！ 2人に手は出させないわよ！」
サンク「怖い怖い」

サンクは下を向き、呆れたように笑っている。

・・・

一方、城内の廊下。

ラルクは1つ1つの扉を開けながら走っている。

ラルク「クソッ！ ホントにデツケエ城だな…一体どこだ？ 早くしないと」

・・・

城へと続くはずの壊れた橋の前。

1つの袋がそこに跳ねて来たかと思うと、そのまま同じように跳ねて橋を飛び降りたのだ。

そのまま落下し始める袋。

すると何やら袋の紐がゆるみ、白色の何かがヒョッコリ出てくる。生物なのかどうなのか…現状ではまだ不明だ。

しかし出てきたものはその”何か”の一部分であることだけは察しがつく。

「ん？…道がなかったのか？ ギャッギャッギャッ…何でか知らねえがあれそうだな。 飛ぶか」

第8話「王座の間にて」(後書き)

袋から現われしものは一体？

ここまで読んでいただきありがとうございます。
次回、袋から出てくる新しいキャラの登場です。

ではまた次回「エレクVSサンク」へ

第9話「エレクVSサンク」

壊れた橋から落下している袋。

その袋のヒモがほどけ、中から見えた白いもの。

さらに大きく袋が開くと中から白色の人間ではない何かが出てきた。それは何かと問われると竜が小さくなったような生物。

尻尾があり耳があり牙がある。

「ギャツギャツギャツ…出れやがった。外の空気なんて久しぶりだな。あの野郎、俺をこんな所に詰め込みやがって。しかし不思議だ…今まで出ようと思ったことは何回もあったが袋が開きやしなかつたんだが…まあそんな事はどうでもいい。何か俺を呼んでいる気がするぜ。ギャツギャツギャツ」

そういつて竜のような生き物は城に向かって飛び出した。

…

王座の間。

サンク「リユーム。お前はトリスイテご夫妻と一緒に別の部屋で待機してる」

リユーム「了解です…」

サンク「それでは奪わせてもらいますか」

エレク（私はウティを使ったことなんてないけどやるしかないわよね…）

そういつとサンクは羽織っていたマントを手に持ち出した。

エレク（マントを？ あれがウティってこと？）

サンク「 外套包み（オン・ザ・ヒマティオン） ” 「

そういうとエレクに向かってマントを投げた。

エレクの頭の上で大きく広がり、何やらバチバチと音がしている。

エレク「 え？…何すんのよ！ 」

サンク「 電気にご注意を。 ” 外套流し（ヒマティオン・オン） ” 「

エレク「 え！ 」

そういうとマントはエレクへと覆いかぶさり、直後にバチバチと鳴っていた音が大きくなる。

どうやらマントの内側から電気が流れているようだ。

しばらくそれを眺めているサンク。

サンク「 充分ですかね… 」

そういうとマントがサンクの元へと戻る。

サンク「 ほう…風ですか？ あの一瞬でよく機転がきいたものだ 」

エレクの体の周りを風が包み込んでいる。

その風が盾となり電気から身を守ったようだ。

エレク「 ハア…危なかった 」

サンク「 少しばかりやかいかいですが、守ってばかりではどうしようもないですよ 」

エレク「 助けがくるまで耐えれば、あんなにかすぐに終わりよ 」

それを聞いてサンクは笑い出す。

サンク「フフフ…素人ですね。 なら試してみては？」

エレク「どういう意味よ」

サンク「すぐに分かりますよ」

そう言つてサンクは再びマントをエレクに向かって投げる。

マントは再びエレクの上空で止まると、今度は槍のような形へと変化する。

エレク（あのマント…好きなように形を作り変えられるの？ まるで大きな折り紙）

サンク「さあ…先ほどと同じ結果になるでしょうかね？」

ヒマティオン・サンダー
” 外套雷

”

エレク「不味い！」

電気を纏つた槍先がエレクの方へと向くと、頭上から勢いよく降り注いだ。

間一髪、エレクは横へと転がり何とかかわしていた。

それはまるで実体のある雷。

床へと突き刺さっている。

サンク「判断力はやはり素晴らしい。 先ほどと同じ事をしていた

ら串刺しでしたね」

エレク（布が床に突き刺さるですって？ あんなの喰らったら一溜

まりもないじゃない）

サンク「さあ…今度は守るのではなく逃げ続けるとでも言うんですかね？」

エレク「それはあんたの目で判断したら？ 風よつねる！」

リーフ・オーラ
” 風波

”

サンク「足元を…」

波のように足元で吹き荒れた風によりサンクはバランスを崩し倒れ
そうになる。

エレク「風よ叩け！ ”風鞭”」
リーフ・フウヒ

風で作られた目に見える鞭。

バランスを崩したサンクに向かって叩き落とす。
ぶつかる瞬間、眩い閃光が発せられた。

エレク「油断してるから足元すくわれるのよ」

「油断など一切していませんよ」

エレク「な！」

一瞬の閃光がおさまると、サンクは何事もなかったかのように立っ
ていた。

自分を守るようにマントを覆いかぶさっている。

どうやら先ほどの閃光は風と電気がぶつかり起こったようだ。

エレク「マントで……」

サンク「そして油断しているのはどちらでしょうか？ 覚えておい
たほうがいい…雷は何度も落ちるんですよ」

エレク「え…？」

いつの間にかサンクを包んでいたマントがなくなっている。

それはエレクの頭上、先ほどと同じように槍へとすでに形状を変え
終えていた。

サンク「 ”ヒマティオン・サンダー外套雷”」

エレク「あ……」

エレクへと突き刺さるつかという時…。

「ギヤッギヤッギヤッ。 やぐゝ止まらねえ」

謎の竜が王座の間の窓を突き破った。

第9話「エレクVSサンク」（後書き）

謎が乱入。

この生物については次回、詳しく説明をいれます。
一応、絵もありますので。

ではまた次回「ヴォレ登場」へ

第10話「ヴォレ登場」

謎の竜が飛び込んだことにより窓が割れ、ガシャーンという音が響く。

その音は廊下を走っているラルクにも聞こえていた。

ラルク「な、何だ？ あつちか？」

・・・

王座の間。

窓を突き破ったスピードのままエレクへとぶつかった竜。

それにより倒れこんだエレクは上空からの攻撃を運良く避けられていた。

一方の竜は床にうつぶせに倒れている。

60

エレク「いった〜い！ 何なのよ一体」

「ギャツギャツギャツ。 痛え…久しぶりに飛んだのにスピード出しすぎたぜ」

エレク「え？ 何…あれ？」

サンク「…」

「ん…何だお前ら？」

エレク「それはこっちのセリフよ！ あんた何？」

「俺か？ 俺の名前は ”ヴォレ” 竜だ」

ヴォレ。

自称、竜だが見た目は何かと言われれば竜でありそうだ。

しかし竜のような緑色ではなく体は全体的に白い。

2足歩行で体長60cmほど、体は小さく丸みをおびている。

耳は垂れていて30cmほどの尻尾もある。

4本の手足には犬のような鋭い爪があり、尻尾ほどの翼が背中から生えていて、翼の先にも鋭い爪のようなものがついている。

> i 3 4 6 8 — 4 1 1 <

エレク「竜って…随分小さいわね」

ヴォレ「アギヤ？ 女…お前殺されてえのか？」

エレク「あれよ…可愛げがあるってことよ」

ヴォレ「当たり前だ。 かつこよさの中にあるこのキュートさこそ俺の魅力の1つだ」

エレク（カツコイイとは言っていないけどね）

ヴォレ「お前も魅力があるぜ。 気に入ったしもべにしてやるう、ギヤツギヤツ」

エレク「な、何で私が」

その時、王座の間の扉が開く。

ラルク「ここか！」

エレク「ラルク！」

ラルク「おゝエレク。 無事だったか…ん？」

サンク「次から次へと…」

ラルク「誰だ？ その男と…何だ！ そのデカイトカゲは！ 面白え〜！」

ヴォレ「ギヤツギヤツギヤツ…てめえ死にてえのか？」

ラルク「おゝおゝやれる口のトカゲだな。 やるか？」

エレク「ラルク、待って！ こいつ多分、害はないと思うから」

エレクがそう言ってる間にヴォレはラルクに向かって口から火を吹いた。

その瞬間、白い体が赤みを帯びる。

ヴォレ「フォーマット・火 焦げる！」 竜の息吹」
ラルク「おゝ火を吹いたぞ。 こっちも”フラ…ん？”

ラルクが何かしようとしたがヴォレの火はラルクを避け壁にぶつかった。

ヴォレ「避けた？ いやてめえ何した？ ギヤツギヤツ」

ラルク「いや…俺は何もしてないぞ」

ヴォレ（どういうこった？）

サンク「さて…色々とアクシデントもありましたが進めましょうか？ 私の名はサンク。 お見知りおきを」

ラルク「おう…俺はラルク」

サンク「そちらの得体の知れないトカゲはいいとしてラルクさん、何かしますか？」

ヴォレ（得体が知れない？ それでトカゲ？ さらにはどうでもいい？ カッチーン）

ラルク「ん？ いやエレク？」

エレク「そいつが敵よ。 ラルク、ぶっ倒しちゃって」

ラルク「おう！」

ヴォレ「おいおい、ちょっと待て赤髪。 あっちの金髪野郎は俺が殺す」

ラルク「いやいいよ。 お前は見てれば」

ヴォレ「あ？ てめえが見てればいいんだよ！」

サンク「ラルクさんでもトカゲでもどっちでもいいですよ。 時間が無駄になりますし、どうせなら2人まとめて来てください」

2人はサンクを睨み付ける。

ラルク「おい、トカゲ。 だつてよ」

ヴォレ「…ギヤツギヤツギヤツ。

お前との決着はその後だな。

あいつはとにかく殺す」

サンク「始めましょうか」

エレク「頑張つて〜！」

第10話「ヴォレ登場」(後書き)

本番開始!

ここまで読んでいただきありがとうございます。

さてヴォレ登場。

絵も入れさせていただけますマスコットキャラ的存在になればと思います(笑)

ではまた次回「共同戦線」へ

第11話「共同戦線」

ラルク、ヴォレ、サンク。

向かい合い、そして睨みあう。

それをよそにエレクは王座の間の扉に手をかけていた。

エレク「ラルク！ ここは任せたわよ。 私は両親の所へ」

ラルク「おう！ 気をつける」

そう言つてエレクは部屋を出て行った。

少し先の部屋。

大食堂。

そこの扉を開けると3人はいた。

エレク「お父様！ お母様！」

プ&ロ「エレク！」

リユーム「…来たのか」

エレク「何もしてないでしょうね？」

リユームを睨むエレク。

そのリユームはというと部屋に数十はあるイスの1つに腰をおろし腕を組んでいる。

リユーム「してねえよ」

エレク「あんた何がしたいの」

リユーム「別に言う必要もないって言ったろ？ しかしだ…お前たちがあいつを倒してくれるなら俺は大歓迎だ」

エレク「…どうということよ？」

リユーム「計画があるんだよ…先に言っておくが教えろと言われて

も教えはしない」
エルク「…計画？」

・・・

王座の間。

睨み合いが続くしばらくの静寂。
最初に動いたのはヴォレだった。

ヴォレ「フォーマット・火 焦げろ！」 竜の息吹”」

ヴォレの口から広がる炎の息。

それはサンクに向かい伸びていった。

サンクはゆっくりと自分の前にマントを広げる。

電気を流しているようでマントにぶつかった火は相殺され消えた。

サンク「」 外套流し（ヒマティオン・オン）」

ヴォレ「ギャツギャツギャツ…マントに電気が」

ラルク「また電気が…いいな」

ラルクは目を輝かせ羨ましそうにマントを眺めている。

ヴォレ「テメエはやる気あんのか？」

ラルク「やる気満々だぞ！ いくぞ」 フラム・ブウル 火乃玉”」

サンク「また火ですか。 わざわざガードする必要もありませんね」

そういうとサンクは火の玉に向かってマントを投げた。

サンク「」 外套包み（オン・ザ・ヒマティオン）」

マントに包まれた火の玉は消えてしまったのだろう。
すぐさまマントは開きラルクの上に覆いかぶさった。

ラルク「い！ 何だ？」

サンク「電気にご注意を。 ” 外套流し（ヒマティオン・オン） ” 」

その合図と共にまた電気が流れた。

ラルク「アガガガガ」

サンク「戻れ」

そう言うとマントはサンクの元へと戻った。

サンク「どうですか？ 私の電気は？」

ラルク「ガファッ。体が痺れる……」

「 ” 竜の息吹 ” 」

サンク「ッ！」

間一髪、背後からのヴォレの炎に対し、サンクはマントを自分に覆いかぶせてガードした。

ヴォレ「……………ギャッギャッギャッ。おい赤髪、ちょっと聞け」

ラルク「ん？」

そういうとヴォレはラルクに近くに行き、耳元で何か言い出す。
話を聞き終わるとラルク笑った。

ラルク「ニツ、OK。 ” フラム・ブウル 火乃玉 ” と ” フラム・ブリユイ 火雨 ” 」

サンク「火の玉に加え火の雨ですか。しかし数を増やそうが包んでしまえば意味がない」

さっきと同じようにサンクはマントを覆いかぶさった。
それを見てラルクの口元は上がった。

「よおー！」

サンク「なっ！」

ヴォレ「フォーマット・火 燃え裂ける！」 竜の爪”

サンク「ガファッ」

マントの中に潜り込んでいたヴォレ。

サンクに燃える爪を喰らわせた。

ラルク「ヨツシャーー！！！」

第11話「共同戦線」(後書き)

好タツグ?

ここまで読んでいただきありがとうございます。
そつえば小説を意識した小説を書き始めたので、よかったらそちらも読んで見て下さい。

ではまた次回「カミナリ注意報」へ

第12話「カミナリ注意報」

大食堂。

エレク「計画？ 計画って何よ」

リユーム「おいおい、言っただろ？ 聞かれたって教えはしねえよ」

エレク「あのマントの男を倒してくれるなら歓迎って言ったわよね？」

リユーム「ああ、言ったな」

エレク「ならあなたはテネーブルとは敵同士ってわけ？」

リユーム「勘違いされても癪だからな。仲間ではない…それだけは言っておく」

エレク「仲間じゃないって…じゃあやつぱり」

リユーム「それ以上は詮索せんさくすんな…それじゃあな。今回の件は俺が上手く言ってるよ。感謝しろよ」

エレク「え？ あ、ありがとう？」

そう言ってリユームは部屋を出て行った。

エレク「（本当に謎な奴ね） お父様！ お母様！」

エレクはフランスとロヌに近づいて2人を自由にした。

ロヌ「エレク！」

フランス「ありがとう」

エレク「私は何もしてないよ。そしてまだ終わってない…あとはラルクに」

・・・

王座の間。

サンクはヴォレの爪をまともに受け、その場に片膝をつく。

ラルク「ヨッシャー！ やったぞ」

ヴォレ「ギャツギャツギャツ。 ほぼ俺の活躍だな」

ラルク「トカゲ、お前凄いな」

ヴォレ「トカゲじゃねーよ。 それと当たり前だ！ 俺様だぞ」

サンク「ハア、ハア。 今のは効きましたよ」

ラルク「参ったか？」

サンク「ご冗談を。 もう隙を与えませんよ」

そう言うとマント天井に投げた。

投げられたマントは天井を旋回するように回り始める。

サンク「雷を喰らうがいい！」 ライトニング・フォール ” 外套雷光”

ヴォレ「ん！」

ラルク「うお！ 危ねえ！」

1 発目を避けるラルクとヴォレ。

しかし天井に浮いているマントからは無数の電撃が落ちてくる。

ただ落ちるだけではなく落ちた電撃からは眩い光も発せられ視界すらも奪われてしまうようだ。

ラルク「何も… 見えねえ」

ヴォレ「右だ！ 次は後ろに下がれ！」

ヴォレの言葉に従うままにラルクは移動する。

ギリギリではあるが何とか電撃を避けさせてもらっている。

ラルク「トカゲ、お前、見えるのか？」

ヴォレ「てめえらよりはな…左だ！」

サンク（思っていたより厄介な生物ですね…なら）

天井で回り続けていたマントが高度を下げ、回転を続けたままラルクへと向かってきている。

もちろんラルクは視界を奪われ、それを確認できてはいない。

サンク「外套廻り（ヒマティオン・ターン）」

それは例えるなら巨大な手裏剣。

しかも電気を帯びているため強度は数倍になっているだろう。

ヴォレ「その場に伏せる、赤髪！」

ラルク「ッ！」

間一髪で交わしたかのように見えたが、マントはそのままヴォレに向かってきていた。

ヴォレ「狙いは…」

サンク（…そちら）

ヴォレ「ギャツギャツ…残念だが俺は見えてるぜ」

サンク「見えてようが関係ないとしたら？」

手裏剣のようにヴォレに飛んできていたマント。

その目に見えているマントを避けようとした矢先だった。

突然、そのマントからヴォレに向かって真横に電撃がとんできたのだ。

直前まで目には見えていなかった電撃をヴォレはまともに受けてし

まった。

ヴォレ「アギヤツ！」
ラルク「トカゲ！」

第12話「カミナリ注意報」（後書き）

痛恨。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

今回の戦闘は初陣ということでヴォレにスポットを当ててますね。

ではまた次回「カミナリのち晴れ」へ

第13話「カミナリのち晴れ」

小さな腹部に思い切り電撃を受けたヴォレ。

そのヴォレに追い討ちをかけるかのように手裏剣のようなマントは向かってきている。

ラルク「トカゲ！ 危ねえぞ！」

飛ぶことが出来ず、床へと落下し始めているヴォレ。

気絶しているのか定かではないがピクリとも動かなかったヴォレに手裏剣型のマントが直撃する。

サンク「まずは1匹」

笑みを浮かべたサンクと心配そうなラルク。

しかし次の瞬間、2人の顔は驚きの表情で一致する。

ラルク「ん？」

サンク「いない…消えた？」

ヴォレの姿が何処にもなかったのだ。

マントはそのままサンクの元に戻り始めている。

サンク「一体何処に…」

「痛えな…クソ野郎」

サンク「ッ！」

直撃したかのように見えたがマントの裏側にヴォレは張り付いていたのだ。

そのヴォレの貼り付けたままサンクの元に戻ったマント。
2人の距離はほぼ零距离。

ヴォレ「フォーマット・火 燃え上がれ！」 竜の翼”
サンク「グフツ」

翼を動かし繰り出されたのは零距离からの熱風。
それに吹き飛ばされるかのようにサンクは壁へと飛ばされ激突する。

ヴォレ「今だ！」

ラルク「よしっ！ 凄えぞ、トカゲ！」

壁にぶつかり倒れているサンク。

走り出したラルクとヴォレ、共に右の拳と爪が赤い色を帯び始めた。

サンク「舐めるな！」 四角い雷”
スクエア・ライトニング

自分の目の前に大きく広げたマント。

そのマント全体から光線のように巨大な電撃が発射される。

ヴォレ「デケエな……」

ラルク「任せろ！」 炎上壁”
フラム・ミュール

ラルクは炎の壁をつくる。

サンク「フハハハハ！ そんなもので防げるとでも？」

笑い声を上げるサンク。

バチチ…。

ラルクの炎の壁にぶつかる少し前に電撃に何かがぶつかった。

それにより勢いが弱まった電撃は炎の壁にぶつかり消滅する。

サンク「何！」

驚くサンクの目に映るのは炎の壁を突きぬけ走ってくる1人と1匹。

ラルク「炎拳……」

ヴォレ「フォーマット・火 燃え裂ける！」

サンク「ま、待て……」

「 フラム・プワン」！

「 竜の爪」！

サンク「アガファ……ガフ……」

ラルクとヴォレの拳がサンクの両頬に当たる。

城の壁を突き破り、サンクは城外へと吹き飛ばされ地面へと落ち気絶した。

リユーム「計画通りって所か……お前ら撤収だ」

さつき電撃に何かしたのはリユームだろう。

サンクの敗北を見届けるとリユームは城を後にした。

リユームの言葉を受けて兵たちも帰っていく。

ラルク「おし！」

ヴォレ「ギャツギャツギャツ。 制裁完了！」

そういうと2人はハイタッチした。

ヴォレ「アギヤ！　そういえばテメエとの決着もまだだったな」
ラルク「ん？　やるか？」

ヴォレ「たりめえだ！　燃え裂ける！　”竜の爪”」
ラルク「うお！…ってあれ？」

ヴォレの爪はラルクには当たらなかった。

ヴォレ「何だと！」

ラルク「何やってんだ？　俺、動いてないぞ」

ヴォレ「テメエ…”竜の爪”　”竜の爪”　”竜の爪”」

ラルクが全く動かなくてもヴォレの攻撃は一切、ラルクには当たらなかった。

まるで磁石が反発するかの様に触れられないのだ。

ラルク「ハッハッハッ。　面白いなくお前」

ヴォレ「一体何だっただ…ん？　ちよつと待て…（思い出せ、思い出せ）」

ラルク「どうした？」

ヴォレ「（あのしもべ女がこいつを…ラルク…確か自分でもラルクって）…おい。　まさかお前の苗字はフファミリーネームラームか？」

ラルク「ん？　何で知ってたんだ？　そうだぞ、俺の名前はフファミリーネームラーム」
「ラルクだ」

ヴォレ「チツ…そういう事か」

ラルク「どういう事だ？　何か分かったのか？」

ヴォレ「あの野郎の息子って事か」

ラルク「え！」

第13話「カミナリのち晴れ」(後書き)

父を知る者。

ここまで読んでいただきありがとうございました。
四角い雷って技名は何気に気に入ってます笑

ではまた次回「コール×コール」へ

第14話「コール×コール」

大食堂。

サンクが城の壁を突き破り吹き飛ばされた大きな音。この部屋にもその音は聞こえていた。

エレク「今は…お父様、お母様行きましょう」

・・・

ヴォレは疲れたのか飛ぶのをやめて地面へと着地する。一方のラルクは驚き、立ったままだ。

ラルク「お、おい。あの野郎の息子って、お前まさか父さんを知ってるのか？」

ヴォレ「当たり前だ。お前の親父が俺をこの袋に封印しやがったんだからな」

ヴォレはどこに含んでいたのかは分からないが口から袋を吐き捨てた。

ラルクはそれを拾い上げながら尋ねる。

ラルク「お前を袋に封印？ 何でだ？」

ヴォレ「理由なんてするか！ あのクソ野郎」

ラルク「父さんは無事なのか？」

ヴォレ「そんな事はしらねえよ。俺はお前の親父の島…つまりお前の島にいる時に封印されたんだからな」

ラルク「じゃあ何もわかんねえじゃねえか」

ラルクは肩を落としたように、その場に座り込んでしまった。

ヴォレ「だが良い事を教えてやるよ。俺の封印が有効だったって事はお前の親父は生きてるって事だ」

ラルク「え！ 本当か？」

ヴォレ「間違いねえだろうな…こついうウティは想った張本人が死んだら無効になるからな」

ラルク「父さんは生きてるのか…それだけ分かっただけでも充分だ」

ヴォレ「俺にとっても好都合。封印した理由なんて二の次、こんな事しやがって俺が殺すまで死なれちゃ困るな」

ラルク「おい！ 俺の父さんだぞ！」

ヴォレ「知ったことか」

ヴォレはそっぽを向くようにラルクに背を向けてしまった。

ヴォレ「とにかくだ！ テメエがあの子の息子なら俺はお前には出せねえ」

ラルク「手は出せないってどういうことだ？」

ヴォレ「封印には便利なこつて色々と条件もあるんだよ。それが証拠に長年、袋から出れなかった俺が出れたのもお前が袋に触れたから。お前、袋に触ったのは最近だろ？」

ラルク「そついや、母さんに渡されて初めて触ったな」

ヴォレ「つまりお前が袋に触ったら俺は袋から出られるって条件だったんだよ。厄介な事に他にも条件はあるようだが」

ラルク「他にも？」

ラルクは首をかしげる。

ヴォレ「最初に話した通り、お前に害がある行動は出来ねえようだ。普通に触れることは可能みたいだが…さっきの見ただろ？ あれ

がいい例だ」

ラルク「炎が俺を避けたり、お前の攻撃が当たらなかつたやつか！
あれ面白いよな」

ヴォレ「笑いごとじゃねえ！ さらに笑い事じゃねえのが、お前と
行動を共にしなきゃなんねえって事だ」

ラルク「何でだ？」

ヴォレ「詳しくは分からねえがお前の側を離れると、何かに引き寄
せられるのに加え、むず痒さが半端じゃねえ…推測だがこれも都合
のいい事に害がなきゃ離れても問題ねえんだろうな…（チツ何かが
呼んでる気がしたのはこれか）」

ラルク「ふ〜ん…何だかイマイチよく分かんねえけど一緒に来るっ
て事か？」

ヴォレ「ギャツギャツギャ…全部てめえの親父の封印のせいだがな。
今すぐにも殺しに行きたい所だが、どうやら親父を探してるん
だろ？」

ラルク「ああ、島を出たきり帰ってこないんだ」

ヴォレ「あの野郎の息子ってのはしゃくに障るがしょうがねえ…お
前と一緒にいれば因縁の相手にも会えそつだ。少しに間、我慢し
てやる…テメエも俺のしもべにしてやるから有難く思いな」

ラルク「しもべにはなんねえけど、お前…名前は？」

ヴォレ「ヴォレ、竜だ」

ラルク「ヴォレか！ じゃあこれからよヨロシクな！」

ラルクは後ろを向いているヴォレの小さな肩に手を置いた。
人差し指だけを伸ばしている。

ヴォレ「しょうが…」

プニツ。

振り向いたヴォレの顔に人差し指が刺さる。

ラルク「ワハハ！ ヨロシクな」
ヴォレ「ギャッー！ やっぱりテメエもいつか殺す！」

・・・

しばらくすると王座の間の扉が開きエレクとエレクの両親が入ってきた。

エレク「うわーこれは派手にやってくれたわね…でもあいつがいなくて事は勝ったのよね？」

ラルク「ああ、楽勝だったぞ」

ヴォレ「ギャッギャッギャッ、ほほ俺のおかげだな」

エレク「はいはい…2人ともありがとう」

エレクは笑い顔を見せた。

フランス「私からもお礼を言わせてくれ。本当にありがとう」

ロヌ「エレクの世話をしてくれてありがとうね」

フランスとロヌは深々と頭を下げた。

エレク「世話なんてされてないって…」

ラルク「気にすんな」

フランス「ところで君の名前はラルク君らしいね？」

ラルク「おう！ そうだぞ」

ロヌ「あなた…」

フランス「ああ、フرائمⅡラルク君。お父さんに似て立派な青年のようだ」

ラルク「な！ おじさん、父さんを知ってるのか？」

フランス「君のお父さんとはウティの封印を目的に結成された”コ
ール×コール”の仲間だ」

ラルク「コール…コール？」

フランス「おや、何も聞かされてないのかい？ 君のお父さんを筆
頭に最終的には6人の仲間が集った小さな集団だよ」

ラルク「どういう事だ？ 結成されたんなら皆で封印に行ったんじ
ゃないのか？ 何でおじさんはここにいるんだ？」

それを聞きフランスの顔は一変して驚きへと変わる。

フランス「き、君のお父さんは家にいるのかい？」

ラルク「いや…封印に出たつきり一度も帰ってきてないぞ」

フランス「何だって…いや順をおって説明しよう。 2年前、あの
島の出来事を」

第14話「コール×コール」(後書き)

明かされる経緯。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

明かされるわけではなく、むしろ次回で謎は増えると思いますがお気になさらずで。

ではまた次回「6つの水晶」へ

第15話「6つの水晶」

時は2年前。

ここはとある島、名を”アンヴワイエ島”。

フランス「随分と遠くまで来たな」

「ああ。 だけど封印場所と最後の1つはさっぱりだな」

「やっぱり噂どおり封印場所なんて存在しないんじゃないかしら？」

「えへへ、だけどもあるかもしれないだし諦めるわけにもいかないよ」

「違うない」

「それに封印方法らしきものも分かったんだ。 それだけでも充分進んでいるじゃねえか」

「ええ」

「さて、この島も一通り見て回ったしそろそろ行くか？」

フランス「ああ、それにしても不思議な島だったな」

「違うない。 人がいた形跡はあるのに誰もいやしない」

「特徴という特徴は島の真ん中に建っている巨大なアンテナですね」

「一体何だったんだろうね？ あれは」

フランス「考えてもしょうがないさ。 あれも一通り調べたが特に何もなかったしな」

「さあそろそろ行くぞ」

出発準備をする6人。

島の中心に建っているアンテナが少しずつ動き出しているが気づくものは誰もいない。

アンテナから音がする。

「お…り…す…？ おく…しあげ…う。 め…と」

何か喋ったのだろうか？

その声のようによく分からない耳鳴りのあとアンテナが光り輝きだした。

6人はその光に包まれていく。

フランス「うう…何が起こったんだ？ ここはどこ…な！」

フランスが目を覚ました場所はフランスがよく知っている景色。島の中心に建つ城はまぎれもなくフランスの城だった。

フランス「な、何故…トリスイテ島に！」

…

フランス「…これが2年前に起きた出来事だ」

ラルク「…」

ラルクは無言でフランスを見続けている。

思いついたかのように口又はエレクへとこっそり耳打ちをして部屋を出て行った。

フランス「私が気づいたときにはこの島にいた。そして仲間の1

人に連絡がとれ、彼も気づいた時には自分の故郷に居たらしい」

エレク「全員が自分の故郷へと飛ばされたって事？」

フランス「分からない。しかしその仲間の話を聞いたときは私もそう思った。だがラルク君」

ラルク「…」

フランス「君のお父さんは帰ってきていない。謎は深まるばかりだ」

ヴォレ「ギャツギャツギャツ。 テメエの親父は色々面倒なやつだな」

エレク「他の人たちに会いに行ったりはしてないの？」

フランス「連絡が取れた1人には私も直接、話をしようと考えて会いに行こうとした。しかし出来なかった」

エレク「出来なかった？ どうして？」

フランス「島から出ることができないんだ」

ラルク「出れない？」

フランス「これもあのアンテナの影響なのかは分からない。しかし島を出ようとしても出れないんだ…まるで何かに遮られるように」

エレク「じゃあその連絡が取れた人から何か話は？」

フランス「彼も光に包まれた後には故郷にいたらしく手がかり何一つ分からなかった」

ヴォレ「そいつは外には？」

フランス「同じく出れないらしい。他の者達もおそらく同じだろう」

各々が何かを考えるかのようにしばらくの静寂。

ラルク「それよりおじさん、封印の方法がわかったのか？」

フランス「あ、ああ…やはり鍵は白いウティ。 ”6つの水晶”」

ヴォレ「スイスクリスタル？」

フランス「水晶に宿りし白いからしい…それらにはエレクが今持っている指輪には風の力が宿っているように封印の力が宿っているようだ。 私たちはその水晶を5つまで集めた。そして6つ目を探している途中であの島に誘われたんだ」

ヴォレ「誘われた？」

フランス「その島に立ち寄る数日前に、ある島で黒いフードの声からするに男だろう…その人物に教えてもらって」
エレク「関係性は分からないけど、何か怪しいわね」

フランスは腰をあげると部屋にあった棚から何かを取り出してきた。

フランス「これがスイスクリスタルの一つ」

フランスも右手の平と同じくらいの小さな水晶だ。

ヴォレ「まあ普通の水晶だが…そんなもんをよく探せたな」

フランス「クリスタルシエルシェ」 私達はこう呼んだ。 水晶に宿りし水晶を探す探索ウティだ」

ラルク「ん？ そんなもんがあるなら何で最後の1つが見つからないんだ？」

フランス「不思議な事にその1個だけが何も反応しなかったんだ」
ラルク「そりゃあ不思議だ」

エレク「その探索ウティは今何処に？」
フランス「分からない。もしかしたら他の誰かが持っているかもしれないが、しかし大丈夫だ」

ラルク「ん？」

フランス「他のものたちも1つずつ、スイスクリスタルを持っているはずだ」

ヴォレ「話が早いな。つまり、ギャツギャツ」
フランス「ああ、まずは他の者たちに会いに行きクリスタルを回収するといいだろう。もちろん最後の1つも探しながら」

ラルク「おし！」

フランス「島から出れない私達はこんな事でしか役に立てなくてスマナイ」

ラルク「いゝや充分さ。 父さんの仲間の事も分かったし、それに

道筋が出来た！」

フランス「鳥を出れない私は君を待っていた。 いや…君のような私たちと同じ気持ちを持ったものを」

ヴォレ「鳥を出れないんじや封印は出来ねえからな」

フランス「ラルク君、君の事はお父さんから聞いていたよ。 夢を貫く男だと。 君が封印を志してくれてよかった」

ラルク「ああ。 夢は邪魔させねえぞ」

フランス「フフ…では私たちの夢、君に託すでしょう。 出ておいで、アクリス」

フランスがそう言うところクリスタルは輝きだし現れたのは不思議な生物。

現れたのは牛のような体長に鹿のような角がはえた四足歩行の生物。

体は全身、茶色く尻尾がチヨロンと生えている。

エレク「え！ 何この子」

フランス「封印の力は特別なんだろう。 メインとして宿っている力はこの子」

エレク「生き物も宿るって事？ 初めて知った…」

ラルク「オモシレエ〜な〜！ 何だこいつ！」

フランス「分かりやすく言えばシカの仲間だろう。 草食動物で力もそれほどない。 しかし人を乗せる事も出来るので移動の時には乗せて貰うといいだろう」

ヴォレ「それなら俺は必要ねえな」

ラルク「お〜凄いな、お前！」

アクリスの頭をポンポンと触ってみるラルク。

エレク「へ〜牛みたいだけど角はシカね」

ヴオレ「ギャツギャツ。結構デカイな」

ラルク「じゃあこれから宜しくな。アクリス」

アクリス「よろしくです」

ヴオレ「ギャツ？ イラツク喋り方だな。もっとハキハキ喋れね
えのか？」

アクリス「がぐんばります」

エレク「まあいいんじゃない。癒し系よ」

フランス「さて…ラルク君。君にはもう少し、私達が知りえたウ
テイというものについて教えておこう」

第15話「6つの水晶」(後書き)

本格指導！

ここまで読んでいただきありがとうございます。

アクリスは博物誌で登場する幻想動物をモチーフにしています。

ではまた次回「メモリー」へ

第16話「メモリー」

フランス「私達が知りえたウティについて教えておこう」

ラルク「ウティについてってどういう事だ？」

フランス「まずラルク君の持っているウティは…」

ラルク「これだぞ」

ラルクは自分の首に巻いてあるハチマキを右手の人差し指で指差す。

フランス「ハチマキかな？…もしかするとそれは」

ラルク「父さんから貰ったんだ。3年前に島を出て行くときに」

フランス「なるほど…話は聞いていたよ。それは白いウティだね？」

ラルク「そうみたいだな…白いウティなんてのがあってのはエレクから聞いて知ったんだけど」

フランス「一般的なウティよりも特別な力を持つ白い力を持つウティ。謎は多いがその分

力も大きい。いい例が複数を同時に扱えるという点だ」

ヴォレ「融合ってやつだろ？」

フランス「その通り。白い力同士は互いの力が合わさり1つの力となる。しかし融合だけに限らず個々としても2つ以上を扱うことも可能だ」

エレク「つまり融合させなくても複数の力を使うって事が出来るわけね」

フランス「これは基本と言ってもいいだろう。何も争いの道具に限らず日常生活でもこれを応用されている場面はあるのでね…失礼」

フランスはラルクとエレクのウティを借りると何かし始めた。

手の平に乗せたハチマキから炎を出し、その周りを風が包んでいる。

ラルク「あつたけえ」

エレク「炎の熱を風で流してるのね」

フランス「こんなようにね」

フランスはウティをラルクへと戻す。

フランス「さて…もう少し続けよう。メモリーはご存知かな？」

ラルク「メモリー？」

ラルクは首をかしげる。

フランス「大丈夫、説明しよう。ウティは身に着けている者がその力を扱うことが出来る」

ヴォレ「当たり前は事だな」

フランス「身に着けてさえいれば手の平から炎や電気、氷などを魔法のように出すことさえ可能になる。大袈裟に言えば口からそれらを出す事だつて可能になるわけだ」

ラルク「え！ そうなのか？ 口からか…面白え〜今度やってみよう」

フランス「白いウティは複数同時に使うことで力が弱まってしまふというウティのデメリットを解除する…いわばウティのリミッターを外した物とも言つていいだろう。メモリーもそれに通ずるだろう」

エレクから預かった白いウティが突然、白く輝いた。

その後、エレクへと指輪を戻す。

エレク「今の何したの？」

フランス「フフ」

フランスは少し笑うと、手の平をエレクへと向ける。すると吹き抜けるように風が通り過ぎるのだった。

エレク「え！今の風って…まさかお父様？」

フランス「ああ、そうさ。これがメモリー」

ヴォレ「つまりメモリーってのはその言葉通り記憶。記憶させち

まえば手元にもなくても使えるって要領か？」

フランス「竜の…ヴォレ君だったか。理解が早い」

ラルク「何だ？どういう事だ？おじさん魔法使いだっただのか？」

それを聞き、エレクとヴォレは白い目で、フランスは苦笑いをして
いる。

フランス「白いウティに自分を記録させてしまえば手元になくても
使えるわけだ。それがメモリー。私はさつき指輪に自分をメモ
リーさせたんだよ」

ラルク「そういうことか！それどうやんだ！」

フランス「簡単だよ。念じればいいだけさ…強く。そうすれば

ウティは応えてくれる」

ヴォレ「簡単なこつたな」

ラルク「念じるのか…おし！」

そう言うラルクは八チマキを握り目を閉じた。

エレク「お父様」

フランス「エレクもやってみなさい」

エレク「はい！」

同じようにエレクも指輪を持ち目を閉じた。

しばらくするとラルクのウティが、その少し後にエレクのウティが
白く光り輝いた。

フランス「メモリー完了だ」

ラルク「おゝ光ったぞ。 これでもう俺は自由に使えるのか？」

フランス「その通り。 そのウティはラルク君を使用者と記録した」

エレク（この指輪も私を）

フランス「一応言っておくがメモリーを消すのも同じ要領だ」

ヴォレ「つまり同じように念じればいいって事だな。 変な奴にメ

モリーされたらどうすんだ？」

フランス「心配いらぬ。 全ては念じればいいだけさ。 しかし

逆に言えば君らのメモリーを他の者に消される可能性もある。 そ

うなってしまうっては手元になくっては使えなくなってしまう…そこだ

けは注意しなさい」

ラルク「よし！ 何とか理解した。 色々ありがとうな！ おじ

さん」

ラルクは再びハチマキを首に巻くと立ち上がって頭を下げた。

フランス「礼にはおよばないよ。 さてそろそろ料理も出来ただろ

う…今夜は泊まっていくといい」

ラルク「ご馳走してくれるのか？ うおゝ飯だゝ行くぞ！」

ヴォレ「ギヤツギヤツギヤツ。 飯だゝ」

エレク「…」

そんな中、エレクは1人浮かない顔をしていたのだ。

...

大食堂。

長いテーブルの上にはこれでもかというくらいに料理が並んでいる。全てロヌの手作りのようだ。

ロヌ「さあさあ、トリスイテ家の救世主さん達、どんどん食べて頂戴」

「うまそ〜いただきます!」

ラルクとヴォレはすぐさま料理に手を伸ばした。

フランス「フッフ、久しぶりに賑やかな食事だ」

ロヌ「おかわりもあるから遠慮せずだね」

そんな言葉は全く意味はなくラルクとヴォレは料理を食べるのに夢中だった。

エレク「…」

ロヌ「ほらほらエレクも食べなさい」

エレク「う、うん」

ラルク「ぼうしなんだ？ ほまえもぴっかり食え」

ヴォレ「汚えな。飲み込んでから喋ろ」

エレク「…お父さ」

フランス「いいんだよ」

エレク「え？」

フランス「お前も一緒に封印したいんだろ？ だけど私たちが気にして戸惑っていた。見ていれば分かるさ」

エレク「う、うん」

フランス「心配要らないさ。何も気にする必要はない。お前も

私の意志を継ぎ封印を志してくれるのなら私は嬉しい限りさ」

エレク「本当にいい…の？」

ロ又「私も大丈夫よ。 エレクもラルク君や可愛い竜さんもいるなら心配いらぬしね」

ヴォレ「ギヤツギヤツギヤツ。 任せとけ」

エレク「お母様：お父様：ありがとう！」

ラルク「良かったじゃねえか」

エレク「うん！ これで私も目標が出来た。 お父様、お母様、 2

人の想い私が引き受ける」

フランス「ああ、期待してるぞ：エレク」

ロ又「だけど無茶だけはしないでね」

エレク「はい！」

返事をしたエレクの瞳は潤んでいた。

ラルク「さあ、ほら食べ食べ」

ヴォレ「そうだ、食べ食べ」

エレク「アハハ。 あんたらが言うなっつゝの。 アハハ」

・
・
・

賑やかな夕食も終わり長かったような1日が更けていく。

すっかり城も静かになった。

旅の疲れと戦いの疲れ。

積み重なった疲れ。

それぞれ人々は溜まった疲労を取り除くように眠りにつくのだった。

第16話「メモリー」(後書き)

安息へ。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

こちら辺の設定を最大限、活用できるように努力したいです。

ではまた次回「放たれる刺客」へ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3238v/>

心魔道具～クール・ウティ

2011年12月8日23時53分発行